日本文化を肯定するのか？

２０１８年3月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

さて、拙文を読み進んでおられる方の心には、いま、懸念が広がっているのではないでしょうか。つまり、この筆者は、欧米文化を悪者扱いにして、日本文化を丸ごと肯定しているのではないかという不安です。聖書が教える神やキリストの教えを、自分たちの文化に合わせて解釈し、また構築してきた西欧的キリスト教を嫌うあまり、日本文化を美化しすぎているのではないかという疑いです。

たしかに明治初頭からの、近代日本キリスト教の先駆者たちの多くは、西欧的キリスト教を嫌い、日本的キリスト教を樹立しようという高邁な意識に満ちていました。そのとき彼らが頼んだのは「聖書のみ」という理念です。彼らは日本の文化を重んじ、日本精神を高揚し、武士道を美化し、これらを聖書と直結できる優れたものと考えたのです。

彼らは、日本的キリスト教を目指しながら、結局、キリスト教を日本化してしまい、福音によって日本変えることはおろか、キリスト教化することにさえ失敗してしまいました。「聖書のみ」という理念も、果たしてどれだけ「聖書のみ」であったか、はなはだ怪しいものです。札幌バンドの内村鑑三とその弟子たちも、横浜バンドの上村正久とその後継者たちも、熊本バンドの金森通倫とその仲間たちも、同じ傾向でした。日本独自のキリスト教を高々と謳いながら、その実、キリスト教の臭いのする日本教に陥ったのです。

紆余曲折はあったにせよ、彼らの多くは、日本文化を聖書の教えによって洗い直すことなしに、そのまま肯定してしまったのです。それは、決定的に非聖書的なことでした。自分たちが日本文化に生きる日本人であることを当然の前提として、キリスト教の衣を着たのです。そのために、非戦論を唱えていながら日露戦争の勝利に狂喜し、聖書の精神で世界を見ることをおろそかにして、太平洋戦争の勝利を積極的に祈願する日本人になってしまいました。あくまでも戦争に反対し、太平洋戦争のときも日本の勝利を祈らず、世界の平和を祈ったクリスチャンは、本当にごくわずかでした。

戦争というような極限状態の中で生きたクリスチャンたちのことを、現代の平和ボケしたクリスチャンが、軽々しく批判することは避けたいと思いますが、たとえ、甲子園では

故郷の高校を応援するような、郷土愛は認めたとしても、日本の勝利に狂気する「非戦論者」には、なってほしくなかったと思います。たとえクリスチャンに対する迫害が迫っていたとしても、太平洋戦争で日本の勝利を祈願する日本人には、なってほしくなかったと思います。世界の列強の覇権主義、植民地主義政策の終焉を祈ってほしかったのです。

　いま拙文をしたためている筆者は、日本の文化にはよいところがたくさんあると考えています。ほかの文化に比べて、優れたところがたくさんあると見ています。ただし、どうひいき目に見ても、日本文化には醜いところも短所も欠点も、またたくさんあります。とても素敵な日本文化が、視点を変えるととんでもない、まるで「ぬえ」のような姿になってしまうことが多いのです。

　文化とは、罪のために神のもとから追放されてしまった人間が、神なしに作り上げたものです。聖書が与えられたユダヤ文化にしても、神聖な文化ではなく、堕落した人間の文化にすぎません。神から追放された人間は、霊的には死んだものとなって悪魔の支配の中に入れられたのです。したがってこの世の文化は、すべて霊的死者の文化であり、悪魔の支配の文化です。基本的にそして原則的に、この世の文化はことごとく神に敵対する文化であり、神の裁きと刑罰の対象なのです。私たち日本人にはいとおしく、懐かしく、慕わしいものであったとしてもても、日本の文化もまた、神にとっては臭気芬々たるものなのです。

　ですから、厳しい断罪と拒絶の感覚なしには、日本文化を語ることができません。そこが、筆者とかつての偉大な日本人クリスチャンたちとの違いです。たとえどれほど日本を愛し、日本文化を好ましいと感じていても、泥水を愛する魚が、泥水を好ましいと感じるのと同じことです。筆者がいかに美しいと褒め、高く評価しようとも、日本の文化は罪の文化であり、神の裁きの対象なのです。

　その日本文化の中で育てられた私たちは、生まれ変わったとき、悪魔の支配である日本の文化から贖いだされ、神の支配である神の国の文化に入ったものです。わたしたちは救いに伴う罪の悔い改めと共に、日本の文化に別れを告げるべきものです。神の国に新しく生まれた私たちは、神の国に新しく生まれたという霊的事実を、日常の生活の中で積極的に表現して行くべきものです。日本文化の罪性を厳しく問い、そこからの脱却を図らなければなりません。

　日本文化を捨てろというのではありません。日本文化もまた罪であることを理解して、自分たちは罪の社会に生きているという自覚のもとに、神の国の原則に生きるということ

です。その神の国の原則で生きる上で、具体的にはどうすべきかというとき、日本的な文化への適応がおこるのです。日本人クリスチャンたちは、ほかの日本人たちと同じように、日本文化を継承します。しかし、そこには一度きっぱりとした罪の認識と悔い改めという、断絶がなければならないのです。日本人だからといって、日本文化をそのまま継続してはならないのです。

とはいえ、神のもとを追放された人間は、神に似せて造られた性質を完全に失ってしまったのではありません。日本人もおなじです。たとえ神の祝福を受けるには値しないものとなり、永遠の滅びがふさわしいものとなったとしても、神の姿を内に留めているのです。また、神の愛の対象であり続けているのです。もちろん、神に愛されるだけの値打ちがあるから、愛されているのではありません。人間は、神のみ前に価値を失っただけでなく、神に敵対するものとして反価値的存在になってしまいました。神に似せて造られた人間性もまた、ゆがみ、捻じ曲がってしまったのです。それにもかかわらず、神は私たちを愛の対象とし続けていてくださいます。それこそ恵みと呼ぶにふさわしい愛です。私たちは今、すべての祝福を恵みとして受け続けているのです。

人間は罪の結果神から離れ、悪魔の支配の中に生きながら、神のみ姿に似せて造られた本性を完全には失っていないために、さまざまな面で、神の御心にかなった考え方や生き方をすることができます。だから、たとえ悪魔の支配する文化の中に生きていたとしても、ひとりひとりの人間には、自分の生き方の責任が問われるのです。パウロは律法を持たない異邦人は、それぞれの良心に照らしあわされて裁かれると教えています。律法を持たなかった人々、あるいは福音を聞く機会がなかった人は、裁きから免除されるのでも、罪が帳消しにされるのでもありません。キリストの贖いを通して完成された神の救いを受けずに、彼らが救われることはありえず、必ず裁きを受け、滅びに入れられるのです。

というより、むしろ、一度だけこの世に生を受けたすべての人間は、はじめから神を離れた滅びの状態の中に、生を受けているのです。救われなかった人間が滅びるのではなく、すべての人間は生まれながらに滅びていて、救われなかったならば、滅びのまま、滅びの中に生き続けるのです。ただ、救われなかった人間は、みな、同じ刑罰を受けて滅びの中に生き続けるのではなく、一度死んで、その後公正な神の裁きを受け、一人ひとりがそれぞれの行いに応じて報いを受けるように、定められているのです。

そういうわけで、たとえ日本文化がどれほど優れていて、美しく、豊かなものであったとしても、滅びの中にあって、神の怒りの対象であり、裁きの対象です。聖書の教えが、日本文化とそのまま調和することなどありえないのです。明治から昭和にいたるまでの愛国的日本人クリスチャンの間違いは、聖書の光によって日本文化を照らし、鋭く見ること

をしないまま、情緒的に、日本文化という自分たちにとって居心地のよい文化を、聖書と調和の取れたものと断定してしまったことです。それは決して聖書的ではなく、彼らが嫌った西欧のキリスト教と同類の間違いのくり返しであるばかりでなく、さらに悪質な間違いです。

とはいえ、筆者が主張し続けていることは、日本文化に偶像文化という烙印を押して、敵対という間違った手段で伝道するのは、止めたほうが良いということです。それはまず、聖書の解釈の間違いです。神は偶像文化を嫌悪しておられたとしても、その中に住む人々を愛し、救いの対象として近づこうとされていることを、理解しなければなりません。罪人は、神の怒りの対象であると同時に、愛の対象であり、救いの対象でもあるのです。神は最終的怒りをもって裁きを行われる前に、救いを提供してくださったのです。

さらに、神は罪によって堕落した人間の、偶像礼拝だけを特別な罪としては見ておられないことに、気づくべきです。偶像礼拝が特別に悪質な罪として糾弾されたのは、しばしばくり返して語って来たように、あくまでも、イスラエル民族に対してです。しかもアブラハムやヤコブの時代のイスラエル民族ではなく、出エジプト後のイスラエルに対してでした。イスラエルの民全体が、エジプト人に対する神の恐ろしい裁きの奇跡を十度も体験し、その後も引き続き、雲の柱と火の柱に守られまた導かれ、分かれた紅海の底にできた乾いた道を渡らせてもらい、エジプトの軍隊をことごとく滅ぼしてもらい、苦い水を甘い水に変えてもらい、荒野の中でパンと肉を与えてもらっただけでなく、来る日も来る日も神の奇跡のみ手の中に歩ませてもらう体験をしたのち、「私はあなた方を、エジプトの地、奴隷の家から導き上った神である。だから私だけを礼拝しなさい」と命じられたのです。

このような奇跡を体験しなかった民族は、イスラエルに加わってこない限り、偶像礼拝を止めるように告げられ、偶像礼拝のために厳しく糾弾されたことはないのです。神は偶像礼拝にも寛容なお方なのです。ですから、まだ神の救いのみ手を体験していない日本人に、偶像礼拝の罪をもって断罪してはならないのです。むしろ、天地創造の神を認めて、この神に感謝を捧げ、この神を礼拝し、この神に信頼することを教えてあげることこそ大切です。

日本人の宗教心、あるいは本能的神意識は、驚くほど聖書の教える神信仰に近いのです。日本文化を聖書的な文化であるかのように思い込んだ、昔の日本人クリスチャンたちにも、同情の余地はあるのです。今このように語っている筆者は、それらの日本人クリスチャンたちとは、別の流れの中にいます。いわば、それらのクリスチャンたちが毛嫌いした、欧米の宣教師たちの教えを無批判に受け入れる、恥ずべき集団の働きによってクリスチャンになったものです。

この集団に属するクリスチャンたちの多くは、日本文化を敵視し、特に、神道や仏教を偶像礼拝と決め付け、キリストを信じる信仰を勧めるよりも、偶像礼拝を止めさせることに熱心なのです。日本文化の中にある良いもの、美しいも、優れたものに目を止めず、ただ、断罪だけをくり返しているのです。

日本文化と聖書に断絶を認めなかった、昔の愛国的クリスチャンたちも間違っていました。間違った聖書理解に根ざして、頭ごなしに日本文化を敵視してきた、欧米福音主義のクリスチャンたちも間違っています。

日本の文化は罪人の文化ではありますが、ただそれを敵視するのではなく、むしろその中に、聖書の教える正しい神信仰と共通するものを見つけ、あるいは聖書が教える人としての生き方に共通する考え方を見つけだし、それを手づるとして福音を語ることのほうが、伝道の手段として正しいのではないかということです。

また、日本文化を悪魔の支配のもとにある罪人の文化であると認め、自分の内にある日本文化を悔い改め、これと一端手を切った上で、改めて福音に生きるべきです。その、福音に生きる中で、日本文化によって培われた善きもの、美しきものに福音を適用し、昇華していくべきなのです。日本文化に留まってはなりません。

たとえば、日本文化の「和」は美しいもので、多くの点で聖書の教えと非常に良く調和します。しかし、日本の和の文化は、完全に聖書と一致するものではありません。和の文化は、日本独特の弱さや醜さも生み出しています。「寄らば大樹の陰」、「見ざる言わざる聞かざる」、「臭いものには蓋」、「出る杭は打たれる」、「事なかれ主義」、「付和雷同」、「日和見主義」、「仲間はずれ」、「内と外の峻別」、「集団の中で個を失って自己を確立ができない甘え」などなど。まだまだたくさん挙げることができるでしょう。これらは聖書の教えと調和するものではありません。クリスチャンになったならば、自分の内にあるこのような非聖書的日本文化を放棄し、聖書の教える正義、公正、平等などの価値を受け入れなければならないのです。

ただ、筆者が言い続けているのは、伝道の方法として、裁き、非難、糾弾、敵対、論駁などから入るのではなく、友好的な部分、共通の部分を認め、それを利用して入ることのほうがずっと良いということ、効果的であるということなのです。それが、アテネで偶像礼拝をしていた人々を見ても、その偶像礼拝の罪の中に良いものを認め、それを公に語ることによって、聞く人々との共通点を積極的に示し、そこから互いの受容の心を作りあげて、福音の提示を行ったパウロのやり方でした。